
日常の隙間と恐怖

案羽間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常の隙間と恐怖

【Nコード】

N6397V

【作者名】

案羽間

【あらすじ】

就職に失敗、フリーター生活を始めるが、

体質なのか怪奇な現象に遭遇する事多い主人公。

ある事をきっかけに、占い師である利子と知り合いになる。

今まで避けてきた現象に対して、少しずつ主人公の心境が変わり始める。

怪奇
オカルト
SF

ビデオ屋のアルバイト 1

仕事を辞めて久しい。

たいてい貯金のなかった私はアルバイトを始めた。

ビデオ屋のアルバイト。

将来の事以外に、特にストレスの無い生活。

私にとっての社会人経験は、激務の一言でしかなかったのだ。

正直安堵していた。

ある日、変わった客が訪れた。

いや、最初は特に変わったとは思わなかった。

二回目も、三回目も、特に気にしなかった。

四回目、たしかそれくらい、客のレンタル履歴を画面で確認した時だ。

同じシリーズ作品の同じ巻だけを、何度も何度もレンタルしている。

変わった客だな、と、思っていた。

ある日また、その客が訪れた。

返却の対応をするのは初めてだ。

中身を確認する。

先日、画面で確認したタイトルと同じだ。

また、いや、まだこのビデオを借りているのか。

少し寒気というか、ちょっと変わった人なんだと思った。

今返却した、ということは、これで最後なのか？

普通、返却に来たビデオのレンタルを延長する時は、その場で告げるはず。

なんというか、満足したんだろうか？

と思った。

少し経って、また同じ客がビデオの返却に現れた。

中身を確認する。

あの時返却したタイトルだ。

ぎょつとして。

ちょっと怖いのと、面白いのと半分で、聞いてみることにした。

「この作品、お気に入りなんですか？」

軽い感じで聞いた。

「・・・」

うつすら笑って返事が無い。

客は女性で、おとなしそうな感じに見える。

会話にもならず、気まずいのでそのまま返却処理を終える。

女性客は、何も借りずにそのまま帰った。

その日、店員の間で、その話題で盛り上がった。

やはり、他の店員も不思議に思っていたようだ。

不謹慎な事だが。

面白半分で、少しいたずらを試みよう、という話になった。

レンタルビデオ店では、ビデオ・DVD 等 破損等で見れなくなってしまうものがよくある。

特に大きなチェーンでもないうちの店は、そうだったものは、代品が来るまでは当然お倉入りになる。

そこでそのビデオ、少しの間カウンターの裏というか、そういったビデオを保管する所に移してしまおう。

という話になった。

もちろん店長には内緒。

そしてその日から、そのビデオは破損扱いとして、廃棄までカウンターの裏に収納され、お蔵入りとなった。

少し経って、またあの客が訪れた。

返却に。

また同じビデオだ。

他の店員の誰かが、いつの間にか元の棚に戻していたのかな？

店は24時間営業なので、自分がシフトに入っていない時に、中身を確認して戻した可能性はある。

でもちよつと気味が悪くなった。

女性と目が合う。

一瞬だった。

犬が歯を食いしやるような、物凄い形相で睨まれた。

「！」

動転してしまった。

でも、いたずらの事は彼女は知らないはず。

女性はまた、何も借りずにそのまま帰った。

その日、先日ビデオの事で盛り上がった店員にその話をすると。

「実は夜番の人と同じ話で盛り上がってて、なんでこのビデオがよけてあるのかは、俺が話をつけたから、店長以外みんな知ってる」

と返ってきた。

彼も不思議がっているようだった。

「店長かなあ？」

と、半分笑い話で盛り上がっていたのだが。

正直私は怖くなった。

数日後、その話をしていた店員が辞めた。

彼もアルバイトなので、辞めるなんてのは良くある話だが。

他の店員の話によると、私の入っていない時間帯に、店内で急に大声を出してそのまま帰宅。

電話にて両親から連絡があったらしい。

彼も就職に失敗した口で、私とは気が合ったし、人柄から急におかしな事をするとは思えなかった。

あの女性の事が頭をよぎった。

いや、関係はない。

でも、それからは、私はあの女性が来るのが恐ろしくてしょうがなかった。

数日後の帰り道。

夜の10時頃、店を出て少しの所。

夏だった。

自転車を押しながら、ゆっくり夜道を歩く。

先日の件が少し頭から離れかかっていた頃。

道の向こう側から、ゆっくり歩いてくる人影。

あの女だ。

あの女。

すれ違うまでに道を変えるか・・。

と思ったが、考えすぎだと言い聞かせた。

すれ違う。

・・

・・

・・

なにもない、考えすぎだ。

常連客なんだから、会釈のひとつでもすべきだったのかと考えた。

翌日、夜番の人間が一人辞めた事を聞いた。

体調を崩したらしい。

関係ない、と言いつ聞かせたが、頭のどこかで、次は自分の番という脅迫じみた感覚が押し寄せた。

心霊話じゃあるまいし。

私は辞めてしまった昼番の店員の携帯番号を知っていたので、電話で話してみることにした。

「お客様の都合により、お繋ぎ出来ません。」

繋がらなかった。

料金を払っていないのかな？

私はとにかく、電話が繋がらない事の「現実的な理由」を探した。

もう本心は妄想じみた恐怖でいっぱいだった。

辞めよう、アルバイトなんだし。

私はあきらめたように決意して、店長に告げることにした。

結。

ビデオ屋のアルバイト 2

辞めることを決意したその日、私は店長にその旨を伝えた。

店長は同意して、特に引き止める事も無かった。

私は恐怖していたが。

心の半分は。

こんな事は妄想だ。

自分は少しおかしいのか、ちょっとした精神病ではないか？

などと考えていた。

もともと人間関係で前の職場を退職していたのもあって。

なんというか、

「関係妄想のような感覚にとらわれているんだ。」

とも、思っていた。

しかしもう、伝えてしまった。

とたんに、将来の不安や、次のアルバイトなんて見つかるのだろうか。

今月の生活費はどうしよう。

こんなことで辞める自分はクズだ、などという言葉が頭の中で渦巻いた。

なんだかばかしく、悔しくなって、この事を店長に少し話してみることにした。

どうせ辞めるんだ、少しおかしい人間に思われてもいいじゃないか。

そう思った。

「店長、少し聞きたいことがあるんですが・・・」

「あの客のことだろ？」

即答だった。

店長の目つきが険しい。

「あれはああいう客なんだ、入って最初に伝えなかったことは悪かったと思ってる。」

なんというか、店長もそれを知っている事が恐ろしかった。

「あの客に関わると碌なことがない、言わなかったけど、前にも何人が辞めてるんだ。」

「ちょっと変わった客なんだと思うんだが。」

「とにかく、関わらないほうがいい。」

「ビデオも私が戻したよ、あのビデオがカウンターの裏にあったときは、事情は私もすぐ分かったし。」

「前も同じ事があって、何人が辞めている。」

「理由はわからないんだが、聞いても話さないし。」

「わたしも正直、あの客が来る時間帯は避けている。」

「客商売だと、いろいろな客が来るから、中にはあまり関わらないほうがいい客もいるんだと思っている。」

「それに、客に対してそんなことをする君達の方が人間的には問題があると思うよ。」

「この件は特別に責めることはしないけれども、どんな客だとしても悪ふざけはよくない。」

「私からはそれぐらいしか言えない。」

私は黙ってしまった。

頭の中で、現実という言葉が色濃くなった気がした。

正論。

悪ふざけをしていたのは私達だし、冷静に考えれば店長の言つとおり。

なんというか、自分の妄想じみた考えが馬鹿らしくなった。

その日は普通に勤務を終えるつもりだった。

夕方、深夜の時間帯だった、時間も遅くなり、店内は閑散としていて。

私ともう一人のアルバイト君がいたが、彼はカウンターの奥で、確認と称してDVDを見ていた。

私はもうすぐ上がる。

・
・
・

あの女が来た。

レンタルの袋を持っている、返却だ。

どうしよう、もう一人のバイト君と変わろうか・・

などと考えているうちに、もうカウンターの前まで来ていた。

「返却ですね、ありがとうございました。」

声を出す。

「死ねばいいのに」

「家の場所知ってるよ」

「殺しに行こうか」

小声で聞こえた。

無表情。

親の顔が頭をよぎった。

震えがとまらない。

心臓がバクバクいって、どうしようもない。

本当にそうなるんじゃないかと思えてくる感覚。

どうしようどうしようどうしよう

はやくかえってくれ

少し冷静になったのは、アルバイトを上げる時間が来た頃。

家族が心配だったので、家にはすぐ連絡した。

姉が出た、変わりはない。

もう一人のアルバイト君は最近入ったので事情を知らない。

蒼白な私の顔を気遣い

「接客だとこんなことザラですよ^^」

こんな感じで気を紛らわせてくれた。

ありふれたことなのかもしれない。

私は小心者で、礼儀知らずだ、などと思いながら。

店内で夜を明かし、翌朝、朝日の中走って帰宅した。

結局アルバイトはやめる事にして、今日に至る。

団地の話

夏の終わり頃。

友人からいい知らせがあった。

私は昔から写真が趣味なので、かねてから撮影スポットというか。

「写真撮るのにいい所ないかな？」

なんて話をしていたので、友人から、

「すごく雰囲気の良い所があるよ。」

との知らせを貰ったのだった。

そんなに遠くは無く、友人はドライブの途中でそこを見つけたのだという。

団地だった、正確には社宅だったらしい、古くなったので取り壊しが決まったようだ。

住宅地から少し入った所、林に囲まれて、4階建ての団地が6棟ほどあった。

夕方に行くことにした。

夕方のほうが、雰囲気があるからだ。

調子のいい友人なので、写真を撮るのに一緒に来てくれた。

ちょっとした写真家気取り、友人はモデル気取りといった具合で。

おかしなポーズをとって笑いを誘った。

最近

「廃墟萌え」

なんて言葉もあるくらいで、確かに古びた建物には魅力があると、私も思う。

ちょっと怖い気持ちもあったが。

似たような事を考える人は他にもいたようで。

同じ様に写真を撮りに来た人がいる様子だった、なんというか人の気配がある、車は他にも数台停まっていた。

夕焼けとマッチしてとてもいい写真が撮れた。

写真もあらかた撮り終えて、そろそろ帰ろつかと言う話になった。

団地は6棟あり、左右に三棟づつ。

私と友人は真ん中を区切っている部分にいた。

立ち位置から見て敷地の奥側にある棟、

入り口は、ほとんど全て、板のようなもので塞がれていたが、奥の一棟、一箇所、塞がれていない入り口があった。

ちよつと気になって目を向けていると、ひょっこり現れた中年の男性が、普通に団地の中に入っていく。

「ここまだ住んでる人いるじゃん・・・」

「迷惑じゃないかな・・・」

友人に告げると。

「えっ」

といった返事と半笑いの顔。

なんというか、一瞬でノスタルジーもへったくれも無くなったような気がして。

ただただ恥ずかしいような、申し訳ないような。

そんな気分になった。

停まっている車も全て、住民の物のように思えた。

そんなわけで、ひっそりとその団地を跡にした。

友人は帰り道

「死にたくなる団地」

などど不謹慎な冗談をかましていた。

私はこの場所を教えてくれた友人に感謝して。

「ばか」

と返した。

家に帰って数日後、先日撮った写真を見てみようと思ったとき。

カメラのレンズフードが無くなっていることに気づいた。

あそこで落としたのかも。

私は思った。

プラスチックのレンズフードでも、単品で買うとなると値段は結構するもので。

かねてから貧乏無職の私は、しゅしゅ取りに行くことにした。

怖いというより、民家の敷地に勝手に入るような申し訳ない感じ。

後ろめたい・

一人でささっと取りに行つて、無かつたらすぐ帰つてこようと思つた。

団地に着いた、また夕方。

平日だからか、とても静かに感じる。

自分はレンズフードを探して、先日友人と散策した場所を回つた。

団地は6棟あり、左右に三棟づつ。

私はまた、真ん中を区切っている部分にいた。

レンズフードはそこにあつた、カメラに取り付けてみる。

「やっぱり自分のだ。」

ちよつとニヤニヤしていた。

蝉なの蝸なのか、林から鳴き声が響いて。

涼しい風が背中から前方へ抜ける。

時刻は夕方。

古びた団地だけど、人の気配があり、怖くは感じない。

「こういうところは文化財にでもして、保存したらいいのに。」

なんて一人事をつぶやいたりした。

こないだ人が入っていった入り口の所。

なんとなく目を向けていると、またひょっこり現れた中年の男性が、また普通に団地の中に入っていく。

やっぱり住民だなと思った。

カメラを持って来ているし。

ちよつと時間もあつたので、あと少し写真を撮ろうとファインダーを覗いた。

夕焼けの空を一枚

夕焼けをバックに団地を一枚

団地の屋上に人がいる

さっきの中年の男

倒れるようにそのまま落ちた

音はしなかった

あわててカメラを下げると、人影はどこにもない。

だれもいない。

さっきと同じ、でも音が無い。

怖い

急に襲ってくる感覚

急いで車に戻る、なぜだか日が沈んだらもう終わりのような気がして、車まで走る。

途中停まっている他の車が目に留まった、よく見れば内装はボロボロ、廃車のような感じだった。

急いで車に乗り込んで、震えながら帰った。

写真も全部消して、なにもかも忘れることにした。

しばらくの間、あの時の中年の事がかりで新聞を見たりしたが、何もなし、何の噂も聞かない。

あの場所では何があったのかも私は知らない。

この事は友人には話していない。

浮浪者の話

毎年、寒くなると思い出す。

何年だったか、12月頃の話。

友人と夜遊びしていた頃。

夜遊びと言つと聞こえはいいけれど。

実際はファミレスで話をして、ゲームセンターで時間を潰したりしていただけ。

そんな頃の話、とても寒かった。

深夜3時か4時くらいだったと思う。

国道沿いのゲームセンターに友人といった時。

おかしな格好の人がいた。

真冬なのに上はTシャツ、下はパジャマのズボンのような感じ、サングダルを履いていた。

明らかに浮いていたので、鮮明に覚えている。

ゲームをするわけでもなく、目は虚ろで、ただ、スロットコーナーの椅子に座っていた。

翌日の夕方、同じく国道沿いのショッピングセンターに出かけた。

フロアの通路に置かれたソファに、昨日と同じ格好で。

同じ人が座っていた。

目つきも同じ、ただ一点を見つめて座っている。

ちょっと怖いと思った。

ホームレスにしては軽装だなとも思った。

それから1、2週間くらい経って、そんな事は忘れていた頃。

友人から噂を聞いた。

「近所の公園で死体が見つかったんだって。」

自宅近辺はそれなり閑静だと思っていたのに、今はそんな事もあるのかと驚いた。

友人と、遊び半分で、夜中に現場の公園のトイレを見に行ったりもした。

当然、事後なので何もなし。

友人以外の人間も、事件の話をしていたので。

只のうわさではなく、実際にあった事のようなだった。

自殺だったとか、ホームレスが凍死したとか、噂はいろいろ聞いた。

それから半年くらいたって、仕事をしていた時。

突然、ふと思った。

あれは、あの人だったんじゃないか？

距離的には遠くない、歩いて移動できる。

でもどうしてだろう。

あんな格好で、どうしてあそこにいたのだろう？

ホームレスだろうか？

どこかの病院の患者だろうか？

自分も、無関心だったと思う。

警察を呼ぶべきだったのか・・

あまり考えないようにした。

ただ、当然ながら、ああいった人間は、人知れず沙汰されていく。

世の中には、何か、そういったしくみがあるような気がした。

自分も。

この文章を読んでいる人も。

あの冬の、あの人の様になってしまふ可能性が無いわけではないのだ。

非日常の誘い 神には関わるな 1 (前書き)

ちよつと実験的な内容です。

非日常の誘い 神には関わるな 1

秋の始まる頃。

団地と一緒に行った友人から、また変わった知らせが届いた。

「面白い知人がいるから、今度3人で会おう^^」

との事だった、憂鬱な夏の終わりを抜けて。

心も一息、といった時期だった。

その週末、いつもの友人と駅で落ち合い。

「面白い知人」

の自宅へ向かう。

彼曰く、

「神を飼っている人物」

らしい。

意味が分からない。

笑いの神か、二人で漫才でもやるのかと思った。

自分は、少し曲がってはいるものの。

前向きな心を取り戻しつつあった。

激務で体がボロボロになる前の。

何年か前の、あの秋の気持ち。

友人の話は、心半分に、昔のことを思い出していた。

「面白い知人」の自宅に着く。

友人は携帯で連絡を入れ、ドアが開いた。

安っぽいマンションの金属の扉なのに、勝手に開いた。

開けた先にも人はいない。

薄暗い。

「入っていいよ」

奥から声がする。

友人はそのままスタスタと中に入り、私も後に続いた。

入ってみると、普通のマンションの一室で、特に変わったことも無い。

ただ、部屋の照明が薄暗いことだけ。

黒髪の、長髪の男性が、これまた安っぽいビジネスデスクとその椅子に腰掛けていた。

他人に対して、自分の信じている神の証明がしたい。

そういう理由で私と友人は呼ばれたらしい。

もう

＼（＾ｏ＾）／

である。

某掲示板的に言えば、頭の中はまさにこれ。

「だったら、パチンコで勝てる台をを毎回教えて！」
と言いつけて。

やめた。

なんというか、類は友を呼ぶというか。

ここまでできたか、というか。

進退窮まった、というか。

冗談だけど、死にたい気持ちでいっぱいになった。

続

非日常の誘い 神には関わるな 2

神を証明する。

彼の言い分はこうだった。

「これからいくつか、神の力で奇跡を起こす。」

「それが他人の信用にたるものなら、僕はやはり神を飼っていることになる。」

ばかりしいと思った。

空中浮遊でもするんだろうか？

「飼う」

という表現もなんだか気になるし。

部屋には大きな水槽があり、彼は指差した。

水槽の中には、うつすら青く光る、正四面体のクラゲのような物が浮かんでいる。

「あれが神だ」

と、彼は言った。

光源もないのに、うつすらと青く光る。

クラゲだと思った。

最初の奇跡はすぐに実現した。

テレビの競馬中継の順位を、彼は全て言い当てた。

すべて、一等からビリまで、全レース全て。

勘が良いという次元ではなくて。

台本を読むようにスラスラと言い当てた。

友人も驚いていた、蒼白だった。

なんというか、この人を利用して、という邪険な発想以前に怖いと思った。

ちょっと、本当に怖い人かもしれない。

ひょっとしたら録画かも知れない、そう思った。

「ひょっとして、録画だったりして？」

引きつった笑顔で尋ねた。

彼は不機嫌そうな顔をして。

「なら、なら別の事をする。」

と言った。

数時間ほど待たされた後。

テレビのチャンネルを変える。

夕方のニュースがやっている。

内容は確かに今日の出来事、ニュースキャスターが生放送で内容を告げている。

彼がテレビを指差すと

キャスターは無表情のまま、前のめりに倒れた

私と友人は言葉を失って。

でも、これ以上何か言えば、彼はもっとおかしな事をしでかすかも知れない。

次の矛先は自分達かもしれない。

数分前とはまったく違う。

どこか現実感の無い恐怖感。

そんな気持ちで画面を見つめていた。

時間が遅く感じる・・・。

テレビは軽やかな音楽をBGMにして、画面一杯に放送休止のテロップを写し出している。

「信じてもらえたかな？」

そこからは必死に、生返事の会話をして、友人と一緒に逃げよう
に彼の家を出た。

「催眠術のようなものだったんじゃないか？」

と、帰り道、お互いに、必死に、弁明したが、結論はでなかった。

ニョースキヤスターは心臓発作で、死ぬことは無かった。

続

非日常の誘い 神には関わるな 3 (前書き)

終わりは少しグロテスクな感じになります、苦手な方は、ご注意ください。

非日常の誘い 神には関わるな 3

あれからしばらく経った11月。

友人の元に彼からメールが届いた。

友人はあの一件以来、怖がって、彼に対して自分から連絡することはなかった。

あのときも、競馬の予想で三人で盛り上がるつもりだったらしい。

もともとそんな会話から知り合いになったようだ。

そんな彼から、友人の携帯にメールが届いた。

「こないだの事覚えてるか？」

「やっぱり僕の神は本物だったよ。」

「でも」

「神は、ほかにも沢山いて、同じように気づいた人間が、これから取り合いをする事になると思う。」

意味が分からない。

この人はどうかしてる。

頭がおかしい。

と言いたかった、でも、こないだの件があった手前。

なんとも言えない、いやな感じがした。

「いや、こないだのも、絶対何かのイタズラかトリックで、テレビの件も事故だよ。」

「このメールだって手の込んだイタズラだよ。」

最終的には、彼は他の誰かとマジシャン対決でもするのではないか？

という、冗談のような結論が出て、メールも結局返さなかった。

それから1ヶ月くらいたった12月のある日。

友人の携帯に彼から、またメールが届いた。

「神に嫌われてしまったかもしれない。」

「でも、上手くいくと思う。」

「明日、それが解るよ。」

「夜中の2時に、港区の 製油所跡地においでよ。」

「見せたいものがある^-^」

友人の顔色が悪い。

私達は行かなかったら、あのニュースキャスターと同じ目に合うの
だろうか？

このメールは命令なんだろうか？

メールの文面とは裏腹の威圧感、私達にはどうしようもない絶望感
がのしかかった。

なんで、関わってしまったんだろう。

友人を恨んだ。

どの道行っても、いいことはないだろうと思った。

こんな事は妄想かもしれないけれど、でも、もし行かなかったら、ひよっとしたら同じやり方で。

殺されるかもしれない。

多分、二人とも同じ事を考えていたと思う。

妄想だ、騙されるな。

こんなことを考えるから、私は以前もあんな目にあっただ、ということ。

これ以上、関わらなければいいんだ。

この病的な思考が、これまでの恐怖の遠因ではないか。

でも、だめだった、私は友人を説得できなかった。

私達は結局その場所に行くことにした。

付近に車を止め、不審者と思われぬよう、人目に注意しながら。

二人でコソコソと指示された場所に向かう。

真冬の真夜中。

雲ひとつない夜空。

悲しいかな、星は美しくて。

キンキンに冷えた空気が、肌を刺して。

寒さで冴えた頭は、くりかえし、恐怖と、ばかばかしさを訴える。

行き先は携帯のGPSで、かなり細かい場所まで指定されていて。

どこを歩けばいいのかも、メールにきっちり記載してあった。

初めて来る場所とは思えない足取りで、指示された場所に向かう。

しばらく歩くと、工場跡地のはずなのに、敷地内に、照明なのか、ランプというのか。

明かりのついている所があり。

遠目から、うつすらと、立ち上る湯気が見えた。

なんだろう

赤い

「真っ赤だ・・・」

友人の声がした

絶句した。

どうしようもない。

めちやくちゃ。

多分人間だったはずのものが。

まるで上から垂直に押しつぶされたように。

水溜りのように広く。

地面に広がっていて、湯気がうつすら上がっている。

だれだ、かれだ、いやべつのひとも、つぶれたんだ どうして

見た瞬間、二人とも逆方向に走り出した。

もう関わりたくない――

何が起きていたのかもわからない、とにかく関わりたくない。

離れなければ、忘れなければ。

・ 警察にも連絡できなかった、どう説明すればいいのかわからない・

その日は二人でガタガタ震えて夜を明かした。

翌日友人は携帯を解約していた。

見えない所で何があったかはわからない、知らない。

この話はここで終わり。

とにかくもう、考えてはいけない事なんだ。

月に添う花

9月、夜は涼しい。

私は、相変わらず定職は見つからず。

深夜のコンビニでアルバイトをしていた。

コンビニのアルバイトは。

私が予想するよりも、覚える事が多く。

毎日四苦八苦だった。

もともと接客の仕事は苦手だった。

「そうも言ってられないし・・・」

思って、ポロリと独り言。

今日は、朝ではなく、深夜上がりだった、翌朝から用事があったからだ。

夜道

この前の、ビデオ屋の女の事。

まだ、引きずっている。

夜道

思い出す、やっぱり怖い。

少し早足で歩く。

ビデオ屋はここから遠い、今は忘れておこう。

深夜の街、アーケードを抜けて、少し外れにさしかかった。

空を見上げると、雲はなく、月夜。

金色に光る月から、優しく光が届いて、夜道を優しく照らす。

鈴虫の鳴き声が、遠くから聞こえてくる。

もうすぐ十五夜だなあ。

風情があるな、と思った。

「ゆっくり夜空を見上げる機会は、意識しないとあんまりないな。」

またポロリ、独り言。

ゆっくり歩こう。

上を向いて歩こう。

なんて、のんびりした気分になっていた。

視線を下ろす。

踏切だ。

いつも通る踏切。

深夜だから、電車も来ない。

踏み切りの、真ん中辺りを通過した。

もうすぐ、渡り終える。

また空を見上げる。

急に、足首を捕まれたような感覚があった。

「歩く」

というしくみは、何気ないように思えて。

と言うより、人間が動くしくみというのは、全てがとても複雑で。

特に意識していない場合、少しでもテンポを乱されればこうなる・・

とつさに急回転した頭は考えて、そして。

「どしや」

思いつきり転んだ。

遮断機のバーが下りていたら、多分へし折っていたと思う。

とにかく顔が痛い。

手もつかず顔からいったのだ。

「痛たぁ・・・」

またポロリ、今度は涙も出た。

電車は来ない、そんなことあってたまるか。

何より情けない、惨め。

鈴虫の鳴き声だけ、遠くから聞こえる。

なんだか急に力が抜けて、起き上がらないまま、視線を横に向けた。

線路脇に、花が添えてあった。

供えてあった。

月明かりに照らされていた。

night swimming 1

7月の話。

毎日、毎日、暑い日が続いた。

実家暮らしながら、申し訳ないと思って、昼間はエアコンは我慢していた。

そんな頃、遠方で働いていた友人が、一足早く休暇を頂いて、帰ってきた。

いわゆる

「じもつてい」

地元の幼馴染だった。

「幼馴染」

変な期待をしてはいけない。

同性の友人で、その日は二人でお酒を飲んで。

友人には申し訳ないと思いつつも、私の財布の事情から当然、家飲みで。

それでも彼は笑ってくれた。

いっしょに昔話に花を咲かせた。

特に盛り上がるのは中学時代の話。

卒業アルバムの顔写真の事は、いつ話しても笑いの種だ。

「この一列やべえ」

とかいって、昔のアルバムをわざわざ出してきた盛り上がるのだ。

そんな話をしているうちに。

「中学校に行ってみよう。」

「中に入ってみよう。」

という話になった。

私は今、割と、世捨て人なポジションにいる人間なので。

仮に、警察のお世話になっても、問題はないけれど。

彼は違う。

気がかりなので忠告することにした。

「大丈夫、大丈夫！」

正に二つ返事。

忠告なんてお構いなし、と言った感じだった。

彼はもともと、こういう性格なので、言っても無駄だと思っていたけれど。

深夜の学校に無断で入る・

ドラマならともかく・・・

でも、たぶんこの流れは変わらないな。

そう思った、実際少し興味があつたし。

彼は

「幽霊（笑）」

という人物なので。

大物なので。

一緒のノリで話していると、怖いという気持ちは起きなかった。

続

nights swimming 2

夜の学校。

といつても、校舎は古めかしい訳でもなくて。

見た目はまだまだ綺麗なもの、懐かしい白い壁。

年々校舎を増築して。

敷地内に。

まるで、城が要塞のように、ポコポコと、記憶には無い建物が建っていた。

友人の家は、中学校の側門の向かいにあり。

昔、学校が終わって。

「彼の家で遊ぼう！」

と言ったときは。

正門ではなく、閉まっている側門を飛び越えて。

そのまま彼の家に直行した。

ほかにも、時間ギリギリで遅刻しそうになった時。

校門で待ち構える体育教師を、遠目で目視して。

学校前の十字路を。

「回避っ!!」

とばかりに直角に曲がり。

側門をひょいと飛び越えて、そのまま、そ知らぬ顔で教室に向かった事もあった。

学校を見るたびに、色々な事を思い出す。

決して、楽しかったと言える学生生活ではなかったけれど。

今、思い出せば、笑えるような事ばかりに思えた。

昔のことを思い出しながら。

昔のように側門を。

ひょいっと、飛び越える友人。

私は。

「どっこいしょ」

だった。

時間が流れたな、と思った。

防犯の為、当然、校舎には鍵がかかっていた。

二人とも予想はしていたけれど。

友人は。

「ちえっ！」

とばかりにプールの方へ向かった。

本当に昔に戻ったみたいだった。

二人して、ニヤニヤ笑って。

プールの方へ走った。

フェンスをよじ登って。

水が張ってある。

月明りに照らされて。

夜目にも大分慣れた私には。

水面は宝石を散りばめたように、キラキラ輝いて見えた。

プールサイドには人影があった。

3人連れ、自分達と同じクチといった感じだった。

手を上げて。

「お互い内緒なっ！」

といった感じで挨拶する友人。

向こうも、手を上げて。

「おっす！」

といった感じだ。

夜中なので、声は出さない。

すぐに、特にやることもなくなつて。

最初の盛り上がりが少し冷めた頃。

今の、現実の自分に戻るような、ちょっとさみしい気持ちじゃわじわとこみ上げた時。

3人組の一人が、ぽーんとプールに飛び込んだ。

・・・

それを見ていた友人も。

「おっしゃ！」

とばかりに飛び込む

「ザバーン!!」

大きな音が一回響く。

友人と、3人の内、飛び込んだ一人は、声を出さずにニヤニヤ笑いあつて。

それを見ていた自分も、声を殺しながら、腹を抱えて笑った。

ちょっとまずいことしたな、と、さすがに友人も思ったのか。

プールをあがって、三人に手を振った後。

彼はびしょびしょで、それでも二人してニヤニヤ笑いながら。

学校を後にして、その後、すぐ向かいの彼の家でまた、朝まで飲ん

だ。

明け方、うつすらと明るくなる頃。

雑魚寝しながら、彼が言った。

「あいつ、飛び込んだ時、音がしなかったんだよな。」

「なんだか服装も髪型も、昔のヤンキーみたいだったしなあ。」

「幽霊かな？」

冗談交じりだったけれど、そういえば確かに、と思った。

でも、怖いとは思わなかった。

だれかの思い出と一緒に遊んだような気持ちだった。

翌日昼頃、友人の家を後にして。

友人はその二日後、勤務地へ戻っていった。

「次は年末だなあ」

そう言って別れた。

電車の少女 1

「墓参りに行こう。」

8月のある日、姉と話していた。

私は今、母と姉と三人暮らしで。

父とは離婚している。

どうしよもない父親だったので。

正直生きている内は会いたくない。

でも、父方の祖母・祖父には恩がある。

むかし、母が病気をして、入院していた事がある。

その時に、一年ほど、父方の実家に預けられたのだ。

祖母は優しくて、当時の自分はわがままだった。

面倒を見てくれた祖母に対して、私は、見知らぬ土地にいるストレスからか。

ひどい事を沢山言った。

それでも、祖母は優しかった。

私が高校生の頃、まだ父と同居している頃に。

祖父も、祖母も、他界した。

母は今でも、父方の祖父や祖母の事を、父と同じ目で見ている。

よく思っていないのだ。

だから、墓参りは姉と二人、行くことにした。

高速を使って車で二時間、はつきり言って、ど田舎だ。

焼き物で有名な所なので、それなり知名度はあるけれど。

でも、景色は、自分が預けられていた頃と、何も変わらない。

友人が以前、研修で訪れたどこかの街の事を、不謹慎なことに。

「時に忘れられた町・・・」

と表現していた。

ここも同じだと思う。

父の実家には入らなかった、親戚の人とも会いたくないし。

多分、家はほったらかし、幽霊屋敷のようになっているかもしれない。

考えると胸が痛い。

墓参りを終えて、そのまま他県の友人と約束があると言う姉とは、最寄の駅で別れた。

自分には少し楽しみな事があった。

帰り道は鉄道で帰ることにしていたのだ。

「田舎の電車」

写真が趣味な自分には絶好のチャンスだと思った。

電車賃も片道なら半額だし。

嫌な思い出は忘れて、ちよつとつきつきしていた。

続

電車の少女 2

単線の高原鉄道。

一両編成だからなのか、乗客は数人だけでも。

結構満員に思える。

壮年の女性。

年配の男性。

制服を着た学生が数人、流行の携帯ゲームで遊んでいる。

雰囲気はいいけれど、やっぱり「今風」だな、と思った。

高原鉄道の名前通り、どの駅でも、途中停車して写真を撮りたくなくなる光景の連続だった。

田んぼの中の無人駅。

キャンプ場近くの無人駅。

午後の日差しが、車内を仄かなオレンジ色に照らす。

電車の揺れは結構激しくて、ちょっとしたアトラクションのようだった。

修学旅行で行った、某遊園地の、ビックサンダーなんか、あれに近い。

山道の途中で、景観のすばらしい場所を通り。

私は、

「わあっ」

と背面の窓の景色に釘付けになった。

ガラスに顔を押し付けんばかりの勢いだっただ。

平然としている地元民の様子に、恥ずかしくなって、ちょっとしらけて、我に返った。

カメラを出したら、もっと白い目で見られるだろうな、と思い、写真は撮らなかった。

終点はすぐにやってきて、すこし大きいというか、先ほどの電車よりは、本線に近い電車に乗り込んだ。

それでも、ローカル線っぽい路線を選んで、あえて遠回りした。

対面式の、小豆色の長椅子、端っこの席に、手すりに体をもたれさせながら。

足をぽーんと前に投げて、少しだらしなく座る。

複数両編成だったので、客も上手いことばらけて、一車両を独り占めしているような感じだった。

ただ、鈍行で行く列車の旅は、二時間目からは苦痛になる。

写真も結局、乗り換えた駅でしか撮らず。

途中からは景色にも飽きて、うとうとしはじめた。

夏の午後、西からの日差しが下りる車内。

舞っている埃も目にはつきりと映る。

車窓からは。

田んぼ。

道路。

田んぼ。

野焼きの煙。

無人駅。

たまにちよつとした有人駅の繰り返し。

目を瞑る時間が長くなって、時間がどれくらいたったかもうよく分からなくなる。

途中で、母と小さい娘の親子連れが乗ってきた。

目を閉じる。

開くとまた駅に停まっている。

さっきの客が下りていく。

目を閉じる。

開くと、女の子だけがまだ、走っている車内に座っている。

その時は特に気にしなかった。

目を閉じる。

開くと、私のすぐ左側、小柄な人の気配がある、多分、さっきの女の子が座っている。

どきつとした。

半分寝ぼけながら。

迷子かな？

と思っていた。

「おとうさん

「おかあさん

多分女の子が喋ってる。

「おとうさん

「おかあさん

・・・

少し怖くなって、目は覚めていたけれど。

寝たふりを続けた。

「おとうさん」

「おかあさん」

何度も、同じ声が聞こえる。

「おとうさん」

「おかあさん」

怖いと思いながら、自分はなぜか、昔の事を思い出した。

「おとうさん」

「おかあさん」

田舎に預けられた時の、気持ち。

「おとうさん」

「おかあさん」

最初の日は、ご飯も食べれずに、泣き明かしたこと。

「おとうさん」

「おかあさん」

代わりをしてくれた、祖父と祖母のこと。

胸が痛い、やめてほしい。

「おとうさん」

「おかあさん」

「寂しいの？」

急だったけど、目を開いて、話しかけた。

車両には誰もいなかった。

自分は少し泣いていた、夢だと思った。

後から考えると、答え方としては悪手だったと思う。

それから一時間程、電車はそれなりの大きさの地方駅へ到着。

そこからまた急行に乗り換えて、母の待つ家に帰った。

病

仕事をしていた頃。

朝も早くから、夜は深夜まで、ずっとデスクでパソコンに向かう毎日。

たびたび上司に不調を訴えていた私。

「弱いから。」

「それは甘えだと思う。」

と言われ、その通りだとも思ったが。

結局、体も心も壊してしまった。

ひよっとしたら、私の体験している事は、この時に調子を悪くした、自分の脳が原因かもしれない。

と、思う事がよくある。

ある時、どうしようもなくなった私は。

いま「流行」のメンタルクリニックに、すぐるように訪れた。

どうしようも無かった、朝起きても頭の中が真っ白。

服の着替え方すら、どうすればいいか、わけが分からなくなるざまだった。

後から分かった事なのだが、こういった病院には何種類があるらしく。

行けばとにかく薬と診断書を出してくれる所。

時間をかけて、薬やら、認知療法やら、箱庭やらなんやらで、自分の性格から、きっちり治そうとしてくれる所。

自分の行ったところは前者だった、診断書と、薬。

診察時間は10分くらい。

「とにかく薬を飲んで寝ろ」

言い方は優しくかったが、要約すると、こんな感じだった。

結局、2ヶ月間休職して、退職を余儀なくされた。

これだけだと、只の苦労話になってしまふ。

今思つと、の話ではあるけれど。

その時に不思議な物を見た。

今思えば、あれからおかしな物を見たりするようになったかもしれない。

待合室には、数人の患者がいた。

見た感じ全く元気そうな人もいたし、本当に目が虚ろで、会話も、歩くこともままならない。

といった感じの方もみえた。

当時、自分は人目にはどちら側に見えただろう・・・。

そんな中、一人が診察室に呼ばれて、よたよたと歩きながら自分の座っているソファの前を通過した。

彼の背中から、糸のようなものが、ぷらりと出ているのが見えた。

風も無いのにはためいて、背中の部分ではロープぐらいの太さに見えたそれは。

床に着くぐらいには糸ぐらいにの細さになり。

どこかに繋がっているのか、でもそれは、床の途中で見えなくなつた。

老人には数本。

よく見ると、一見元気そうに見えるもう一人の患者の肩あたりからも一本、同じものが出ている。

たまに、空を見上げた時に見える、紐みたいな、目の動きと一緒にについて来るミジンコみたいなやつだと思っていた。

その時はボロボロで、それどころではなかったし、どうでもよかった。

病院には、それから何回も通っていた。

予約の時間や、出される薬の日数の関係なのか。

いつも、同じ患者と待合室で遭遇していた。

ある時から、糸のたくさん付いていた方の患者をぱたりと見かけなくなった。

いつだったか、顔色のいい時期があったので、何度か言葉を交わした。

一ヶ月くらい経って、心配になって、彼の事を主治医に軽く尋ねてみた。

「プライバシーに関わることなので・・・」

当然だけど、教えてはくれなかった。

「ただ、よくない選択をされる方は、私が診察した中でも、何人もみえます」

少し小声で、主治医はボソッとささやいた。

私は、体の調子はかなり良くなって、主治医とも冗談を交わすくらいだったのだ。

少し気を許して、あんなことを口走ったのか。

では、ひょっとしたら、と思ったけれど、それから、あまり考えないようにした。

そのときは、自分の事で精一杯だった。

それからかなり経ったある日、その事を思い出した時から、自分にもその「糸」が付いているのではないかと思った。

たまに、風呂上りに、裸で洗面台の鏡の前で探してみた。

そんな物は自分の体からは出ていない、大丈夫だと思う、考えすぎか。

それとも、自分の目には見えないものなのだろうか。

公園のあの子

夏頃、私は夕方の公園に、よく散歩に出た。

昼間は暑いので、夕方の6時くらいから出かけるのが丁度よかった。小高い丘の上にある公園で、階段を上りきると、私の住む町が一望できた。

夕焼けの空。

日の輪郭はこうも美しく、空に紅を残しながら落ちて行く。

ほとんど毎日来るこの公園、ちょっとした広さで、公園内の歩道を一周するのは歩いて10分程度かかる。

私は先の事の不安を考えたり、気持ちが淀んだ日は、無心になって公園を何週も歩いた。

公園には他にも、ランニングや犬の散歩で訪れる人がいて、私もその人達と一緒に公園の風景の一部に溶け込んでいたと思う。

この公園は、昔大きな台風が来た際に発生した、大量の瓦礫を集めて出来た山に建てられたと聞いていた。

死体も一緒に埋まってる、とか、以前ここでは殺人事件があった、等等、噂はあったけれど。

見る限り全くそんな感じはしない、むしろ最近では、市内でも夜景の綺麗なデートスポットとして有名で、公園の一番高い所に、二人並んで座るカップルの姿もよく見かけた。

日は落ちて、空の紅も消える頃、空の星より一足先に、地上の星が輝きだす。

街は生きている、夜も明るく、色とりどりに輝く。

そんな公園、毎日六時半頃になると、一人でブランコを漕いでいる男の子がいた。

毎日いた、毎日、自分も毎日散歩を心がけていたけれど、たまに行かない日があった。

そんな日でも、この子は来ているのかな、と思った。

夏場は日が長いので、六時半でもまだうっすら明るい、一人で公園に来る子供がいても珍しいことじゃない。

でも不思議な事に、毎日六時半ごろになると、どこからとも無くその子は現れる。

私はもっと早い時間から、円状になった公園の歩道を、少し走り、少し歩きでグルグル回っているのに。

ブランコ近くの時計が六時半を指す頃、いつの間にかそこにいて、

ブランコを漕いでいる。

いつも一人で。

九月に近づくにつれて、同じ六時半でも大分暗くなる。

暗くなると、変わった飛び方をする鳥が舞い始める、暗くて姿はよく見えないが、激しく羽ばたいて上昇し、落ちるように滑空する、蝙蝠だ。

そんな頃でも、あの子はいた、街頭が灯る薄暗い公園の中、ブランコを漕いでいる。

ちょっと怖いな、ある日気になりだした。

とはいえ、夕方の公園、運動用の服装とはいえ、どちらが不審者に見えるかと言えば、多分私・・・

ちよつと離れた所、見晴らしのいい草むらに、カメラと三脚を抱えて、町の夕日を撮影しているように見せかけて。

沈む夕日を眺めながら、あの子がいつ来るのか、確かめてみることにした。

腕時計を見る。

18:25

まだ来る様子が無い。

というか、ブランコ以外の所にいる所を見た事が無い。

半まであと5分、怒涛のごとく走ってきて、「とうっ」とブランコに飛び乗るんだろうか。

そんな光景を想像して、ちょっと笑えてきた。

「兄ちゃん」

後ろから、声がした。

年配の、低くしゃがれた男性の声。

びっくりして振り向くと、同じようにカメラを持った老齢の男性がいた。

銀色のボディの、ちょっと古めかしい感じのカメラを、首から下げ

ている、今買えば結構値が張りそうだ。

公園には、カメラを持った年配の方も結構訪れていて、彼もその一人だと思った。

「さっきからずっと、ブランコの方見てるだろ？」

「この時間は、あそこはあんまり意識しちゃだめだ。」

「あんま良くないもの見るよ。」

いやな事を言われた、自分のやっている事が見透かされた上に、忠告まで入れられた。

「ここはさ、いろいろ因果があるんだよ、そういう物の上に出て来んだ。」

「え、あ、はい・・・」

そのまま、正直に、返事をした。

「もう、大丈夫だ。」

そう言われて、あつ、となつて時計を見る。

18:32

そのままブランコに目をやると、またいつものように、あの子が、ブランコを漕いでいる。

「えっ」

声が出た、いつの間に。

老人が気になって振り向くと・・

誰もいない。

太陽のあつた空の反対側、金色の月が輝いていた。

W a s t e 1 (前書き)

また少し、実験的な内容です。

W a s t e 1

「人生紙吹雪つ。」

・
・
・
・

散ってどうする友人よ。

「なんか間違ってない？」

返す。

「いや、似たようなもんでしょ、この年でフリーターだよ俺。」

「人生紙ふぶきッ!!」

強めに叫ぶ。

「俺もじゃん・・・やめてえ・・・」

弱々しく返す。

私も今年から仲間入りしたので、返す言葉が見当たらない。

小学校時代からの幼馴染、かつ、地元で暮らす友人。

団地の件やら、思い出したくも無い変人の件やら、面白い話と一緒に、いつも何かしら問題を持つてくる友人。

最近、少し様子がおかしい、怒りっぽくなって、不機嫌な日が多い。

私たちは同じ境遇なので、一緒に遊ぶ日が多い、変人の件にもめげなかった彼だったが、最近は少し変なのだ。

とにかく楽しそうに人生を振舞う彼なのに、最近はやイトの愚痴ばかり。

たしかに、年も年だから、いろいろ焦っているんじゃないか、と自分への戒めをこめて納得してみたものの。

やっぱりおかしい、性格が変わってきているようにも思えた。

ある日、友人と一緒に出かけた先で、夕方の事。

冬は日が落ちるのが早くて、行く鳥もどこか寂しげに、夕暮れの町の稜線に消える。

二人分の影が先に伸びて、影もどこか寂しげに歩く・・・

・・・？

何かおかしい、友人の影だけが、何かに無理やり引っ張られるように伸びている、身長は私の方が高いのに。

立ち居地の関係だろうか、最初は思った。

でもやはり変だ、頭の前だけが、まるでつねったほつぺたのように、引っ張られたように先に伸びている。

「最近、なんか変なことあった？」

私は、それとなく勘ぐるように、でもあっけらかんと、尋ねてみた。

友人は立ち止まった。

「実はさ、こないだ墓参りに行ったんだよね、なんというか、先祖に謝るといっか・・・今の状態をさ・・・」

「そんな感じでさ、親戚にも、親にも言わないで、一人で。」

「親の車で行ったけどね！ 足ないしっ！」

ちよつと「あはっ」と惚ける友人、いつもの感じだ。

「クズすなあゝ」

自虐的なことや、おかしい事を言ったときは、こう返すのが二人のルールだ。

彼は、彼なりに自責を感じているんだと分かった、いつも楽しげに振舞う彼だけど、やはりどこかでは、今の生活に後ろめたさを感じていたのだ。

「えらいじゃん！」

「立派！」

「御利益あるよ！」

自分なりに、彼を元氣付けたかったけれど、なかなか言葉が浮かばない。

「ごめん、今日は帰るわ！」

友人はいきなり叫んで、そのまま来た方向とは逆向きに走り出した。

・・・ひょっとしたら、もう会えないんじゃないか、そんな予感がした。

呼び止めることは出来なかった。

言葉が見つからなかった。

思い過ぎした、きっとそうだ。

Waste 2

真冬の2月。

自分また、ビデオ屋のアルバイトをしていた。

あれから数々の就職活動をしてみてはいたものの。

昨今の事情が、特に経験もスキルも無い自分を使ってくれる場所は、なかなか見つからない。

すっかり夜型になってしまった自分には。

結局、自給そこそこ、作業が楽、慣れている。

との理由でまた、今度は、隣の町のビデオ屋で、深夜のアルバイトをする事になっていた。

ビデオ屋、と言うと語弊があるけれど、今は殆どDVDか、BDに置き換わっている。

ただし店の感じは古い、以前潰れた店を再改装しました、といった感じ。

ここは前の店の系列で、そう言われれば、24時間営業もちょっと珍しいかもしれない。

なぜかアダルトな作品の品揃えが豊富で、最初はかなり驚いた。

今日も深夜の店内、1時、2時を回ると辺りは閑散として。

自分と、もう一人の店員と、店内で二人ぼっちになることも珍しくない。

たまに、去年の怖い客の事や、強盗が来たらどうしようなんて考える。

そんな中、一人の女性が来店した。

身長は高く、パンツスーツで、スラッとした体系、黒髪長髪で、出るところはしっかり出ている。

「仕事の出来る女」

そんな感じの客。

怖い感じは全然しない。

しばらくして、レジに向かってスタスタと女性が歩いてくる。

それはもう、深夜のビデオ屋の店内なのに、都会の町を颯爽と歩く

ような感じで。

彼女の、さぞ充実した毎日を想像して、ちょっと嫉妬のような情けない気持ちを感じた。

「しかし、こんな平日の、こんな時間帯にやってくる女性客は、大抵そうだった趣味のアダルト作品などをチョイスするのだ！」

なんでナレーションを頭に流して、自分を慰めた。

DVD作品を数枚、彼女は差し出す。

バーコードをスキャンする、どれどれ・・・

「ピッ」

流行の海外ドラマ1

「ピッ」

流行の海外ドラマ2

「ピッ」

流行の海外ドラマ3

以上、三本。

普通じゃのう・・・

と、ちょっと残念な気持ち、頭の中は、おやじだった。

「一本新作なので、二泊三日になりますが、よろしいですか？」

答えて、女性の顔を見る。

蒼白だ。

お化けでも見るかのような目で。

目をぱつちり見開いて、こちらを呆然と直視している。

深夜の女性客、あまり良い思い出がない・・・

でも、以前よりかなり胆の据わっていた自分は、普通に接客を続ける。

「あの、一本新作なので、二泊三日になりますが、よろしいですか？」

女性は我に帰って、ちょっと顔を赤らめて、恥ずかしそうに早口で答える。

「あつ、大丈夫ですよ・・・！」

清算を終える。

とたん、彼女が唐突に話しかけてくる。

「あの、よく危ない目にあったりしませんか・・・？」

「いえ、いきなりごめんなさい！」

「その・・・」

「結構、変なもの見えたりする人でしょ？」

うわぁ、と思った。

眩暈がした。

あれは妄想だとか、幻覚だとかで済ませようとしていた過去の事が、一気にフラッシュバックして。

一瞬、意識が、ぐにゃぁ、として、立ちくらみのような感じになった。

「・・・・・・・・」

うなづいて、引きつった笑顔をしたと思う。

彼女も、自分に話しかけた事を後悔したような感じで、その後は特に会話のないまま。

お互い気まずそうにして、彼女はそのままDVDの入った袋を受け取って店を出た。

後、一時間で上がりだ・・・

がんばろう！

そう思って自分を励ました。

先日の、友人の事が気かりだった。

W a s t e 3

バイトは上がり。

交代の店員とは、軽めに挨拶して、店を出る。

店には、自転車通っていた。

「帰り道に、コンビニで肉まん買おうかな」

なんて考えながら、置き場へ向かう。

やっぱり夜番というか、夜更かしは、体に良くない。

ちよつと、ふらついた足取りの自分がいた。

途中、店の駐車場で、エンジンをかけたままの車が一台見えた。

ちよつと高そうな、シルバーの、2ドアの、スポーツカーのような型。

車は詳しくないので、どれも一緒に見えるけれど。

なんとなく、高そうな車だなあ、なんて思っただけだ。

車内にいるのはあの女だった。

ナビの画面に照らされて、顔の所だけ、ぼうつと浮かび上がっている。

「車でDVD見てるのかよ。」

独り言、自分では、冷静なつもり。

通りすがりに、中の女性と目が合うと、彼女は血相を変えて。

車から出てきた。

また嫌な目に会ったのだろうか？

いやだ・・・

「あの！ちよっと、話いいかな！？」

深夜に逆ナン、いやそんなわけない、なんて思う以上に、さっきのレジの展開からして関わりたくなかった。

「えっ！？、いやあの用事があるのですいません・・・」

早口、手を正面で左右にバタバタして、明らかに、自分のほうが拳動不審な動きをしていたと思う。

彼女が一方的に話かけて来る。

「私、あなたみたいな人、いままで見たことない、初めて見たの。」

「変な意味じゃなくて、さっき、頷いてたから、きっと分かってくれると思うて！」

彼女も早口、自分はスタスタと駐輪場に向かう足取りを止められずに、歩き続ける。

彼女も並んで歩いてくる、キャッチセールスの勧誘みたいだ。

ちよつと早足で、振り切ろうとしたときに、少し距離が離れた彼女が、大きめな声で言葉を投げた

「足首の糸が！ まだあの踏み切りに繋がってる！」

「あそこにはあんまり行かないほうがいいよ！！！」

立ち止まってしまった。

忘れていた事を思いだしてしまった。

「他にも！ 沢山繋がってる！」

彼女の、声のトーンが少し落ちる。

「中には危ないのも、いくつかある・・・」

「私なら、君にアドバイスが出来ると思う」

私は、今までの事も全部見透かされたような気持ちになって。

救いを求める犬のような顔になって、振り向いた。

「うまく、言えた・・・」

ほっとしたような、優しい顔で、彼女が言った。

なにより先に、友人の事を話そうと思った。

うつすらと白む空、朝日に照らされて、まるで女神のように見えた。

W a s t e 4 (前書き)

ちよつと短編離れしてしまいました、

Waste 4

明け方の車内 - - -

空が白み始めて、駐車場に停めてある車の窓からは、散歩に出ている人の姿がちらほら見えた。

立ち話をするには寒い夜明け、車内に二人。

なんとも言えない雰囲気では話は続く。

「あなたの話した事が本当だとしたら、多分彼は、そういうたモノの影響下にあると思う。」

「あなたが本当に彼を助けたいのなら。」

「あなた自身も、それ、との因果を持つ事になると思うよ。」

「私も、こんな風にあなたと関わりを持ってしまったし、こんな話をしているのも何かの縁だと思う、だから正直に話すね。」

「私は、決して霊媒師とかの類ではないし、でもね、うん、家系かな、ある程度の事は出来るの、見えるというか・・・」

「君も多分、なんとなく解ってくれると思うんだけど、人に憑いている、糸みたいなもの、見たことない？」

「それが 因果 なの、私が勝手に呼んでるだけなんだけど、私は多分、君よりも先まで視えると思う。」

「それが、つながっている先まで・・・」

少しの間の後、彼女が続けた。

「糸の切り方もね、出来る範囲で、だけどね・・・」

「自分の因果ってあまり見えないものなんだけど、君、凄いだよ。」

「私の経験上、今日の帰り道に、車が電車に撥ねられて、バラバラになって即死しても、私は納得するくらい。」

やめてほしい

・・・話だけだと、悪質な靈感商法みたいだ

と思った反面、「糸」の事、「踏切」の事と、話してもいない事を次々に言い当てる彼女には、返す言葉がない。

「やっぱり僕にも糸、ついてるんじゃないか・・・？」

「・・・凄いや、君のは・・・」

なんというか、説得力がありすぎる、質問したのはこっちなのだけれど、本当にやめてほしい・・・。

「でも自分の因果って、自分では、あんまり見えないんだよ、私も自分のは見えないの！」

「私の糸、見える？」

気になって、彼女の体をまじまじと見つめてしまった。

・・・いや、彼女に糸は見えない。

昔、病院でみた「糸」は彼女には見えない。

その時に思い出した、友人にも「糸」は見えなかった。

もうちょっと見ようかな・・・。

まるでオヤジ。

多分、その時の自分の顔と言ったら、見るに耐えなかったはず。

「目付きいやらしいよっ!!」

デコピンが飛んできた。

「いたあっ!!」

どこことなく姉に似た雰囲気だと思った、身内と似ていると思うと、少し話しやすくなる。

「あー見えない見えない!!」

「なんか違うところ見てなかった!？」

「えー見てない見てない!!」

「見てないって何？」

「もうっ！聞くんじゃないかった・・・」

会話は続く。

「あの、友達には、彼には、糸は付いてなかったんです。」

「ただ、影がおかしかったというか、やっぱり変だとは思ってたんだけど、なんか妄想みたいな話だけど・・・。」

「憑いてなかったの？、だったらあんまり時間かからないし、私でもなんとかなるかも。」

「影は・・・、そうゆうことか。」

「私は君の事に興味があるんだけど、まあこれも縁だし、助けてしんぜよう！」

「でも・・・、あいつひょっとしたら今頃ケロっとしてるかも！？、そうだったら、ごめんなさい。」

ちょっとふざけた感じで返した。

「それはないと思うよ。」

エンジンのかかる音、彼女が窓の外を見ながら、急に冷めた表情で返した。

断言に近いその言葉に、私は、以前の「神」を思い出した。

私はその時、彼女とあの時の彼を同列で意識した、やっぱり、なに
か異質だ。

彼女や彼には一体、何が見えているんだろう・

続

W a s t e 5 (前書き)

長くなりました。

Waste 5

「彼はさ、君と境遇がちょっと似てるんだね。」

さっきとは変わって、優しい口調で彼女が話す。

「そこまで分かるんですか？、・・・まあ、似たもの同士というか・
」

「なんとなく、なんだけどね、実体を持った繋がりも少し、視える
の。」

「やっぱりね、友達になる相手とかには、相応の縁とか、因果が繋が
ってるものなんだよ。」

走行中の車内、車窓からは朝の日差しと、通学中の学生、サラリ
ーマンの姿。

お互い進行方向と景色を見ながら、目を合わせないで会話を続ける。

「でも・・・どっちかって言うと、悪友だね！」

少し笑いながら、彼女が言い当てる。

「なんでもお見通しですね・・・。」

「私、今はこんな格好してるけど、占い師なんだ、結構繁盛してるんだよ！」

「運命鑑定料　5万円イタダキマース！」

「ええええ！」

「冗談！」

やっぱり、彼女はどこか人間じみていたというか、「神」の件のあの人とは違うと思った。

途中、友人の携帯に電話をするが、応答がない。

運転する彼女に指示されて、家の電話にかけると、友人の母が受話器を取った。

顔なじみで、幼い頃から良くしてくれた、彼の母さんだ。

どうやら、友人は数日前から寝込んでいて、昨日から食事にも下りてこなくなっただらしい。

彼の部屋は二階にある、友人の母には、今からお見舞いに行く、と伝えた。

「お願いがあるんだけど、いいかな？」

「え、何でしょう？」

「彼の部屋に入って、私があなたに質問したら、それには正直に答えてね。」

「君は素直だから、信用してるからね。」

「は、はい・・・」

なんだろう、この人は何をする気なんだろう。

どうしよう、急に大声を出して除霊じみた事を始めたら。

キエエエ！とか言い出したらどうしよう。

考えた時には、車は既に彼の家の前にあった。

彼の母さんには見舞いと伝えて、二階にある彼の部屋に部屋に入

った。

途端、彼女は険しい顔をして、僕に、一言伝える。

「聞ってる話より・・・かなり悪くなってる、急いだほうがいいね。」

彼は床に敷いてある布団にうつ伏せに寝ていて、見るからにしんどそうに寝込んでいるのが分かる。

「おい！、大丈夫か？ 見舞いに来たぞ！」

「・・・・・・・・」

返事がない、聞こえていないのか。

気がつくと、彼女は、彼の寝ている布団をはさんで反対側に、私の方を向いて立っている。

目が合った途端、彼女が、少し低い、太い声色で、私に向かって言葉投げつけた。

「どうしようもなく、暑いときは、どうすればいいと思う？」

「・・・・・・・・？」

「どうしようもなく、暑いときは、どうすればいいと思うっ？」

「・・・？」

「え、エアコンとか、涼しくすればいいんじゃないかな？」

「それが出来ないときは、どうすればいいと思うっ？」

「・・・暑くない所へ行けば良い・・・？」

「そう」

「では、どうしようもなく寒いときは、どうすればいいと思うっ？」

「寒くない所へ行けばいい。」

「そう」

「では、どうしようもなく、立つこともできないほど、風の吹きさぶ時は、どうすればいいと思っっ。」

「風の吹かない所へ行けばいい。」

「そう」

「では、どうしようもなく、もがくほどに、心苦しい時はどうすればいいと思っっ？」

「・・・」

返答に詰まってしまった

心の苦しくない所へ行く、と、返事をすればいいのだろうか・

どうして突然、こんな禅問答のような事をしているんだろう。

でも、途中で止めてしまうと良くない事があるだろうと感じる。

彼女が言葉を投げる度に、部屋の空気が少しずつ、変わっていく。

肌がピリピリして、空気が張り詰める、外の音が全く聞こえなくなる。

友人は相変わらずしんどそうにして、布団にうつぶせのまま、一言も、喋らないままだ・・・。

「どうしようもなく、あがくほどに、心が、息が、苦しい時はどうすればいいと思う？」

「・・・心安き浄土へ行けばよい。」

！？

友人がその日初めて、小さな言葉で呟いた。

声の感じがどこか違う、まるで別の人だ、どうなっているんだ・・・

「そう」

「では、なぜ、ここににいるのか？」

彼女の目つきが険しくなる。

友人の様子がおかしい、息が荒くなっている、苦しそうだ。

どういう事なのか理解できない、ただ立っているしかない。

沈黙が続く・・・

友人の息はどんどん荒くなっていく、本当に、救急車を呼ばなければと思う程だ。

汗だらけで、見ている自分が辛くて堪らない。

彼女は何をしているんだろうか？

ひょっとしたら自分は何か、騙されているのだろうか、そんな不安が頭をよぎる。

ちょうどその時、彼女は鞆から、小さな鏡を取り出した。

コンパクトの様な形をした、少し古めかしい、変わった形の鏡、鏡のカバーを開いて、手のひらに載せている。

彼女の目付きは、さつきと違ってとても優しく、友人を見つめている。

「心安き所ぞ・・・」

彼女が一言、ささやいて、部屋の空気が急に、いつもの感じという

か、いつもの友人の家の雰囲気になる。

友人が大きく息を吐いて、表情が穏やかになり、静かに寝息を立て始めた。

ああ・・・、戻ったんだ、と感じる。

「パタン」

彼女は急いで鏡のカバーを閉じて、どこから取り出したのかリボンのような紐で、

グルグル巻きにした後、蝶結びのような、ちょっと変わった結びかたをした。

「大事な鏡、しばらくは使えなくなっちゃったよ・・・」

「結構、危なかったよ、糸を辿って、もうここまで来てたんだから。」

「かわいそうなモノなんだけどね、彼が似たような気持ちだった時に、どこかで付いて来ちゃったのかもね。」

「彼は、もう大丈夫だと思うよ。」

理由は分からないが、彼女は「何か」をして、それによって友人の状態が良くなったのは確かだった。

彼の家を出た後、彼女は「ふああ」と大きな欠伸をして。

「そういえば、今日徹夜だった!」

「今日は鏡の供養もしないと行けないし・・・、とりあえずここでお別れ!」

「まだ聞きたいことあるしっ! また連絡するからね!、それに今日は、ちよつと貸しだからねっ!」

そついつて強引に連絡先を交換した後、彼女はあの高そうな車で颯爽と走り去った。

最後に初めて分かった事だけれど、彼女の名前は 諫早 利子と言うらしい。

また、彼女とは関わることになりそうだ・・・。

朝の日差しが、自分の徹夜明けの体にも染みると感じたのは、歩いてビデオ屋まで自転車をとりに行く途中の話。

鏡の話

利子とは、あれから何回か会って話す機会があった。

彼女は自分の占いや、スキルアップの為の実験台に、私の事をよく利用して、いや活用していた。

なにやら、おかしい儀式めいた事をしたり、特製の変なドリンクを頂いたりした。

彼女曰く。

「これで・・・君の寿命は延びるッ！」

だそうで、魔よけだかなんだかに効果があったらしい。

確かに、体調や心象は、昨年よりどんどん良くなってる気がする。

まあ、気楽な暮らしをしていると言う事もあるんだろうけれど。

友人も、あれからすっかり元に戻って、相変わらず元気にやっている。

やっぱりあの時、彼女は何かしらの儀式を行って、その結果、友人は救われたのだ。

占いで生計を立てているという彼女の实力は、やはり本物なんだろ

うと思う。

アルバイトでも雇ってもらえないかな、なんて思う時もあるのだが、ちよつと情けなくて言えないでいた。

ある日、あの時の鏡の事を尋ねてみた。

友人を助けて貰った時、利子が使った鏡の事だ。

やっぱり、ちよつと儀式的な道具なのだろうか？

「あれはね、親から貰ったの、結構大事なものなんだよ。」

「だから、最後に、貸しだよ！ って言ったの。」

「鏡はね、魔術的に、もう1つの世界を作り出せるの。」

「そこに、ちよつと力のある人間が細工を加えると、そういったモノにとっては、まるで極楽浄土に感じるような世界を作り出せるの。」

「無論、擬似的なものなだけだね、永く留まることは、出来ないと思う。」

「その後に、しかるべき供養をしたりする訳。」

「あの時に彼の傍にいたモノはね、かわいそうなモノだったんだよ。」

「同じ事を繰り返すタイプではないね、ふらふら彷徨うタイプかな・、どっちかって言うとか、ね。」

「元々は多分、人間だったと思う、死因というか、そうなった原因はね、多分、寂しいとか、後ろめたいとか、後悔。」

「君の友達とはね、あの時は波長が合ってたんだよね、でもね、結局、見てわかるでしょ？」

「友達はあるふうになるし、そういったモノも、決して、慰められる事は無い。」

「あのままほつといたら、多分、最後は友達も・・・」

少し聞いた事を後悔した。

「そういうのが、どんどん雪だるま式に大きくなっていくこともあるんだよ。」

「無論、そうになったら、私なんか素人の手には負えないから、協会の人とか、もっとプロの人が処理するんだけどね。」

聞けば聞くほど・・・

実際その光景を見た人間としては、あまり詳しくはなりたくないと思ってしまう。

協会、という言葉にも突っ込まない事にした。

「除霊、ですか？」

「ううん、もっと手荒だよ。」

「本当に有害なものは、もっとこう、魔術的に排除する感じがな。」

「消すの、排除する。」

「慰めるとか、供養するとかじゃなくてね、もっとこう、物質じゃないんだけど。」

「ソレを構成する大元から粉々にする感じ、元々、生きてないけど、殺すの。」

よくわからない・・・

「私もあんまり知らないし、君もあんまり知らなくていいと思うよ。」

「私の家は、そういった事に関わりがある家系なんだけど、でも、私はあまり好きじゃないし。」

「だから、占い師なんてやってるんだけどね。」

少しの沈黙のあと、彼女が思い出した様に続ける。

「あ、そうそう、鏡の話に戻すんだけどね！」

「本当に能力がある人間なら、鏡の中に、本物の別世界を作りだせるんだって。」

「無論、魔術的な話だけどね。」

「あの鏡も、結構、力のある身内が造ったものだけど、そこまではいかないんだ。」

「私ね、占い師をしてるでしょ、たまに、曰くつきの品の鑑定みたいな事もするんだけど。」

「良い意味でも、悪い意味でも、そういったモノが結構あるんだよ。」

「いつかね、お金が貯まったら、そういったものをコレクションしたいの！」

「君も、その１つかな（笑）」

「物ですか・・・僕は・・・（笑）」

ポロリと眩く。

彼女の最後の一言は、自分を限りなく不安な気持ちにしてくれた。

言わなかったけれど、私も彼女のことを、心の中の、おかしな友人コレクションの中に加える事にした。

ねこ爺どの

春頃、自分は相変わらず、以前おかしな事があつたあの公園での散歩を日課にしていた。

たしかに色々あつたけれど、やはり散歩の習慣は辞めたくないし、散歩をするなら、あそこが一番だと思つたからだ。

春は桜が咲いて、満開の頃には花見の客も多い、桜が散れば新緑に色づく。

若々しいけど、どこか深い緑。

あそこは、四季がとても鮮やかなのだ、そこらの公園とは何かが違う。

その日も夕方から散歩をしていた、でも、六時半きっかりには、あの時計台は見ない。

夜景の素晴らしさも、ここは格別だ。

日が落ちると、町の灯が灯りだす。

最初は、5だか10だか、数えられるくらいだったのが。

見る見るうちに千だか万だかになって。

それで街の灯火は、今夜も、宇宙^{そいつ}よりも、雲よりも近い場所に銀河

を作るのだ。

人間は、つくづく凄い生き物だと思った、この景色は全て、人間が作ったものだ。

「人間は、凄いよな・・・」

独り言のつもりだった。

自分が吐き捨てた言葉に、どこからともなく返事があった。

「ニンゲンは、つくづくすごいよなあ。」

「すごいいきものだ、がんばっとる、あの、おおきな人塚に、何百人も入りこんで。」

「まいにち暮らしたりするんだからなあ。」

？

人の気配は感じないのに、声がする、それも、歩いている足元から。

「なあ？」

？

立ち止まらず、おそろおそろ足元を見ると、猫がいた。

見かけには、そこらにいるような、普通の猫、毛並みは明るい茶色の、でも少し尻尾の長い。

歩いている自分に併走して付いてくる。

「おーい、無視はないじゃろお。」

猫の口がもごもご動いてる、やっぱり声の主は猫のように見える。

今までも、おかしな事はあつたけれど。

猫にまで話しかけられるなんて、ああ、自分は遂に本当のパラノイアになってしまったか・

とモヤモヤした気持ちを隠せないでいた、最近はなんだか、おかしな事にも慣れてしまったのか、ああまたか、なんてボーっと考える。

でも、どこか可愛らしい、話し方はまるで爺さんのような猫。

「ワシはおまえがちいさい頃からよくしつとるよお。」

「いまはこんなだけど、ひとのこともよくしつとるんだよお。」

いままでの、そういったモノとは違う、どこか優しさを感じる、懐かしいような声。

「あの・・・、ね、猫なんですよね?」

目線は合わせない、平行したままだ、こういったものに、自分から話しかけるのは、多分初めてだと思う。

傍目にはあたかもペットのネコと散歩しているように見えているだろうか・・

「いんやあ、いまはこんなだけなあ、ちょっとまえは氏神みたいなもんだっただよお。」

「ちよつとまえになあ、いろいろあつて、土地も荒れちまったから・・、いまはこんなだけにやあ!」

「なんてなあ。」

「わしがまだちゃんとしとれば、おまえさんも苦労せんでよかったかもなあ。」

「ブランコのあのこもなあ・・・」

なんだろう、なにか知ってるんだろうか。

自分ははつとして、立ち止まって猫の方へ視線を向ける。

猫はその場にちょこんとお座りして、自分の顔を見上げながら、どこか可愛らしい顔つきで、語りかける。

「ちいさいころからしつとるよお。」

「おまえのねえちゃんも、よくあそんどる、ともだちも。」

「ここのらの生まれの子はみんなしつとるよお。」

「いまはこんなだけどなあ・・・」

猫は、急にうつむき加減になって、すこしバツが悪そうに、いぶかしげに話す。

「おまえさんになら、話をきいてもらえるおもって、いきなりですまんかったなあ・・・。」

なんだか、しょぼくれたお爺さんみたいな話し方をする猫だと、ちよつと哀れな気持ちになる。

「マイナス思考は良くないですよ、僕だって、最近は一向きですよ。」

元気づけるような言葉しか浮かばなかったので、こんな事を口走ってしまった。

なんだか、こんな言い方していいんだろうか？　こういったものに。

「ちよつと前は色々ありましたけど、今は結構・・・、前向きなんです。」

「負い目なんて感じなくていいんですよ。」

「元氣出してください。」

自分は、いきなり何を喋っているんだろうと後悔した。

ちよつと失礼な言い方だよな、こついったモノの機嫌を損ねると、どうなるんだろう？

というか、傍目には、猫に一方的に話しかけるおかしな人だよな。なにやってるんだろう自分・・・

「ありがとなあ、うれしいよあ。」

「また、はなしあいて、してくれんかにやあ？」

反射的に頷いてしまった。

返事次第では、この猫はこの先も自分に関わってくるのだろうか？

ひよつとしたら、友人も、こんな経緯であんな目にあつたのじゃないだろうか？

自分もおかしなモノに取り付かれてしまうのか？

しかし、思った時には遅かった。

「ありがとなあ、こんどは、あそびにいくよお」

「もうひがしむでなあ、はよかえったほづがええよ。」

「ここは、よるはあんまりいいところじゃないでやあ、特にいまのころはなあ・・・。」

やっぱりそっち側の、そういったモノの類なのか？

あまり、悪い感じはしないけれど・・・

「・・・そうですね、僕はそろそろ帰ります、お、おやすみさい。」

「ありがとにやあ。」

多分、語尾に、にやあをつけるのは、自身が猫である事を嘲笑した、彼なりの冗談なのだと思う。

そんな事を思つて、少し歩いてから、やっぱり気になって振り向くと、離れた所にさっきの猫が、こちらを向いてお座りしている。

なぜだか自分も、小さく手を振つて、公園を後にする。

まだ肌寒い春の夜、見上げる月は欠けていて、猫の瞳を思い出させた。

呪い 1 (前書き)

利子視点

呪い 1

私は、職業として、占い師をしている。

もともと、諫早の家系は、代々が霊能者のような事をしていて。

私は長女だったので、小さい頃は、出雲やら青森やらに、一人で修行に出されたりもした。

もつとも、私が跡取りになる事はなかったけれど・・・。

私には実力がなかった、特に被う方の能力がなかった。

探るのは特異なほど、得意だったけれど、私の家系、もとい、協会の維持構成に必要な人員には当てはまらなかったらしい。

私も、あんな事を代々生業にしている集団は大嫌いだったし。

小さい頃は、もっとアイドルとか、お花屋さんとか、お姫様とかケ
ーキ屋さんとか・・・

・・・とにかく。

夜中に、使用前の卒塔婆をマイク代わりにして、アイドルのように読経したことも絶対内緒だ。

・・・じゃなくて。

私は学生時代、今よりもっと多感だった頃、自分の能力を、私自身のアイデンティティのように周りに吹聴していた事がある。

その時は、占いなんかよりもっぱら、心霊がらみの相談の方が喜ばれた。

私は、視ることや、たぐる、ことについては、家系の中でも、異様に思われるほど長けていたから。

今思えば、あまり踏み込んではいけない所まで、当時は視ていたし、それをそのまま本人に伝えたりもした。

そんな頃。

友人の姉に、一人、心霊現象で悩まされている人がいると聞いた。

新婚の姉だ、私は彼女と、彼女の姉の新居へ招かれ、相談を受けた。

視ればすぐに分かった。

彼女の姉は、殺意を持って呪われている。

結果として、遅かれ早かれ死ぬだろう。

まるで大きな百足のようなモノが、彼女の姉の体にとぐろを巻いているのだ。

百足の足は、彼女の姉の皮膚に無数の穴を空けながら、そしてその顔は、今にも首元に食いかかろうとする形相だった。

私は、自身を、ある種の経験豊富な人間だと自覚していたけれど、こんなモノは今まで見たことない。

百足は、それ自体が因果の糸のように、尾を長くしていた。

無意識にその先を視た私は、あまりにも近しいその因果に驚く。

呪っている本人は、今、一緒にいる妹。

さすがにこの時は、私はすぐ伝えるべきなのか迷った。

友人は多分、私が、もっともらしい嘘でもつくと思っただけに違いない。

その時理解したのだ、私は結局ピエロだ、そういった役回りを期待されて、ここへ連れてこられたのだ。

心底腹が立った。

「分からない」

とでも伝えて、帰ってしまおうかと思った。

でも、彼女の姉の衰弱は本当に酷かったし。

人道的な考え、とは剥離している事には気づいていたけれど。

一体、どんな方法で、私の友人は彼女の姉に呪いをかけたのか。

それは、その原理に対する好奇心は、私をこの場に留まらせる理由になった。

あれほどの強い呪いを、周りに、私にさえ気付かせもせず展開する。

もしそんな事が出来れば。

私の友人は、呪術者としても、それを隠す術者としても、私を遥かに上回る。

私は、そんな人間と今まで身近にいたという恐ろしさと、どこか嫉妬めいた感情に支配された。

無論、彼女が呪いの術者だったら、の話なのだけれど。

もしそうだとすれば、私もその標的になる可能性は十分にある。

「お菓子を作るんです・・・、クリームを・・・かき混ぜるでしょ？」

「そうすると、ボウルの中のクリームから、人の顔が・・・。」

「たぶっ」

「と出てきて。」

「口の部分をパクパクさせながら。」

「死ね、死ね、死ね、死ね。」

「って何度も、言っんです。」

「玄関の呼び鈴、が鳴るでしょ・・・。」

「それで、インターホンに出ると、カメラにはだれも写らないんですけど。」

「大音量で、死ね！！　死ね！！　死ねえ！！！！　って・・・。」

「ああああああアアアアああああ！！！！！！」

「お姉ちゃん！落ち着いて！！」

「きつとこの家のせいだよ！、こんなこと、引越してからなんだから！！」

「ねえ利子！！・・・どうすればいいの！？」

まるで茶番、でも起きている事態は深刻だ、このままでは友人の姉は確実に死ぬ。

「・・・難しいけど、探ってみる・・・」

「あと、あんたはあんまりお姉ちゃんと一緒にいちゃダメだからね！」

「お姉ちゃんは、旦那さんに付き添ってもらって・・・」

そう伝えて、その日は友人宅を後にした。

呪いの原理を私は知リたかつたし、なぜあそこまでされるのか分からないけれど。

彼女の姉の事も気がかりだった・・・。

続

呪い 2

翌日、彼女の姉は亡くなった。

飛び降りた、近くのマンションから、頭から落ちて、遺体は見るに耐えないほどだったらしい。

全て、友人から聞いた。

友人は、いい感じに、顔色が悪く見えた、話しながら涙をぽろぽろ流していた。

当時私は数人のグループでいつも行動していたので、彼女と私達、友人グループで葬儀にも参加した。

私は、罪悪感に震えた・・・。

私に、被う能力があれば、あの時点で、彼女の姉を救えたかもしれない。

もつと他の、本物の能力者が、偶然にも被うことだけが専門のプロの能力者があの場所に呼ばれていたなら。

あの場所で、彼女の姉を救えたかもしれない。

もしもあの日、遠方ではあるけれど、義兄に、いや母に電話で相談していれば・・・

私はそれほど正義感のあるタイプではない、それに、彼女と姉の事情はあまりよく分らない。

昨日も、呪いだけを見る事に気を取られて、そこまで探る事は出来ずにいた。

でも、友人には、いや、目の前の人殺しには。

怒りと恐怖心、それと幾許かの嫉妬心に似た複雑な感情を抱かずにはいられなかった。

「抜う」

それは、諫早の家系を継ぐ人間にとって、とても重要で、私に欠けていたもの。

私が継ぐはずだった諫早の、退魔の座は、養子として迎えられた兄が継いだ、

私は元々そんな物には興味がなかったし、これで諫早の家から逃れられると思っていた。

でも。

義兄には、心良い感情は持たなかった、憎いとすら思った、嫉妬だ、私は兄を呪いさえしていたと思う。

無論、それが実行に移される事はなかったけれど。

「呪う」

ということ。

やはり始まりは友人の、何らかの感情だろうか？

呪いにも、何段階かのレベルがある、ちょっとした嫌がらせや、気分を落ち込ませるなんて可愛いものから。

人格を狂わせたり、強いものならば人を殺す。

私の家系は、「抜う」側の家系だ、そんなものがあるのだから、友人は「呪う」側の家系なのか？

私は多分、このまま彼女と友人関係が続けざるを得ないだろう、ニセモノの霊能力者としてだ。

繰り返してしまうが、私が何か解っているそぶりを見せたら、彼女は次のターゲットを私にするつもりかもしれない。

実際、「視える」友人として、あそこに私が呼ばれたのだから、私

がもし本物で、呪いの存在に気づいてたと思われれば。

彼女は私に呪いの矛先を向けてくる可能性がある。

でも、そうだとすると、なんでそんなリスクのある事をしたのか？。

私が本物の能力者なら、少なくとも呪っている事自体は私にはバレてしまう。

うる覚えだけど、呪いの術式は、基本、他の人間に知られる事を禁じている。

でないと効果が薄れるからだ、術式によっては、呪い自体が術者に返る事もある。

あれだけの事が出来る術者が、私の事に気づかないとも思えないし・

私は、友人を見つける時、そういった因果を持っていないか、指向性をもって観察していた。

もしそうなら・・・こんな話を一緒にできる友人がいたら・・・

なんて期待していたからだ。

でも友人は糸も、因果も、いたって普通だった。

あの日まで、まったくそれに気付かないなんて。

・・・おかしい。

色々解せなかった、私はより注意深く、でも気付かれぬよう、友人を観察することにした。

呪い 3

それからしばらく経っても、私には何も掴めなかった。

友人には、おかしな所は一切無い、注意深く探しても、それらしい因果も見えない。

私はその頃既に、「占い師」として一人で生計を立ていて、何人もの人間の因果を視ていたし。

自信はあった・・・、注意深く視れば、何か掴めると思っていた。

でも、何も分からない。

目の前には、ただただ、毎日悲しみにくれる友人の姿。

心うらはらに、猜疑の目を向けながら、言葉だけの励ましをかける私。

・・・私の方が悪人みたいだ、友人がもし本当に、只の被害者ならば私は一体、何をしているんだろう？

でも、じゃあ、あの目見た呪いの正体は何だったの？

これは、演技なの・・・？ それとも・・・

いままで感じたことも無いほどの悪意と形相をもって、友人の姉を呪っていた百足。

その因果は確かに、目の前にいる友人から伸びていた。

友人の姉が無くなる直前まで、その気配さえ感じないほど隠された、強い呪い。

目の前の友人が、呪いの術式を生み出し、行使していたのか？

それほどの術者が、呪いを成就させる直前に私に霊視を頼むだろうか？

そんなある日、友人の姉の遺品整理に付き合う事になった。

友人の夫と両親が、或る程度の整理は終えていたのだけれど。

実家に引き取ってある、残った服やアクセサリー類を整理するのに、私も付き添う事にした。

ひよっとしたら、なにか手があるかもしれない・・・

まだ諦められなかった、あれから毎日、悲しみに暮れる友人を見るうち、私は友人を疑っていたことを後悔していた。

でも、だから尚更、原因を、その因果を確かめたかった。

「ごめんね利子、でも私も怖くて・・・、それに・・・思い出したくなくて・・・。」

「毎日励ましてくれてありがとう・・・、利子。」

「ううん、私こそ、ごめん・・・、力になれなくて。」

「お姉ちゃん、色んな病院にも通っていたんだけど、薬も飲んでたんだけど、それでも、どうしようもなくて。」

「だから、ダメ元なんて言い方したら、失礼だけど、でもひょっとしたらと思って、最後に利子に相談したの・・・。」

「・・・。」

言葉が返せない。

私も、自分の能力とあの日の自分を呪った。

あの時、私がなんとか出来たら・・・。

あれから友人は、姉の部屋にはほとんど入れなかったと聞いた。

西日が差し込み、オレンジ色に照らされる室内、新婚だった友人の姉は、新居に移ってまだ日が浅かった。

だから、実家の部屋は、机やベット、家具類もそのまま、両親が引き取った遺品が整理されて置かれていた。

若い女性の部屋だ、ぬいぐるみも窓際に整然と並べてあり、夕日に照らされて、どこか悲しげな目を覗かせる。

「整理つていても、ほとんど捨てるしかないよね・・・」

「ねえ、利子？、何か・・・、何か見える？」

「お姉ちゃん、ここにいないかな？」

「ねえ利子・・・。」

すぐるように私に尋ねて、ぼろぼろと涙を流し始める友人に、私は申し訳なくなつて、部屋の中を必死に探った。

でも何も視えない、気配も感じない。

「ううん・・・。」

「ごめんね、私、結局何の役にも立てなくて・・・。」

二人してぼろぼろと泣き出してしまった。

私自身も、後ろめたくて、情けなくて、でも、友人を信じることも怖くて、涙が止まらない。

二人とも涙して、目を合わせたとき、彼女の耳に、妙な、ぞつとするような違和感を感じた。

ピアスだ、ピアスから、何かが・・・。

「ねえ、そのピアスなんだけど・・・。」

「え？」

友人は左の耳たぶに手をかざして、さっきまでの涙の乾かない目で、私を不思議そうに見つめて、

途中で気が付いたように、話し出した。

「これ、お姉ちゃんとおそろいなもの。」

はっとして私は返す。

「じゃあ、もう一つは？」

「多分・・・この部屋に。」

それから火がついたように、私は友人とそのピアスの片割れを探した。

彼女の両親がしまったのだろうか？

机の上の小物入れの、小さな引き出しの中に、それはあった。

オニキスだろうか？深い黒色をした涙型の宝石が付いたピアス。

オニキスは確か・・・、魔よけにも使われる石。

でも、触れた途端、コールドタールのようにどろっとして、真っ黒な煙のようなモノが、

ピアスに付けられた宝石の中から、どろどろと溢れ出てくるように見えた。

部屋中に、あの時の気配が立ちこめる・・・まずい・・・

西日に照らされる部屋の、友人の影がぐにゃぐにゃと伸び始めて、頭先从、触手のようなモノが2本、ぐねぐねと波打っている。

「なんなの・・・これ・・・？」

「ねえ！そのピアス！いますぐ外して！！」

「え？利子？どうしたの？」

「いいから！！はずして！！」

私は友人から受け取ったピアスをそのまま床に放り投げて、友人をかばうように後ずさりする。

百足だ・・・友人がピアスをつけていた時よりは、幾分も小さく見える百足が、

一方のピアスの石の中からグネグネと体を伸ばし、もう一方のピアスにとぐろを巻いている。

私は興奮していた、呪いのからくりが分かった事、こんなモノ、見たことが無かったこと。

「わかった・・・これだよ・・・お姉さんが亡くなった原因・・・こんなモノがあるなんて。」

「こんなモノ、どこで買ったの！？」

・・・もつと冷静になるべきだった、友人にそれを伝えても、いいことなんて1つもなかったのだから。

友人はその場で泣き崩れてしまった、あのピアスは、ある時占い師の人に貰ったモノらしい。

私は、会ったことは無かったけれど。その占い師の噂は、同業だから聞いたことはあった。

たまに駅前なんかに見れて、よく当たる占いをする、と聞いていた。

片方を友人が、もう片方を幸せになって欲しい人に付けてもらうように、と言われ、

友人は、大好きな姉に、その片方をプレゼントした、というわけだ。

片方のピアスは、着けている人間の生気や、微小な霊気から呪いを生み出し、もう片方のピアスを着けている人間に送り込む。

そういったしくみで動く、呪われたピアス。

世の中にはこんなモノを造る人間がいるなんて・・・。

何か目的があるのか、いかれた冗談なのかわからないけれど、その占い師は、は善意の第三者を装って、友人にこれを渡した。

信じた友人はこれを姉に渡して、受け取った姉も大切に、ピアスを着けていた、それだけ、その結果が・・・。

ピアスはもう私の手には負えなかった、私はこの時、家を出てから初めて、義兄と両親に連絡を取り。

ピアスを送り、処分を頼む事にした、何年ぶりだっただろう？

母や兄と会話するのは……。

友人はそれから結局、自身が姉を殺したようなものと気に病んで、精神を病んでしまった。

私は、自分の能力の無さ以上に、友人を疑った事、自分の見た、その正体を友人に不用意に伝えてしまった事を後悔した。

今思えば、友人は「知る必要のない人間」の側なのだから。

あれから私は必死で修練して、あの時私が出来なかった沢山の被う手段を身に着けたし。

そういったモノから人を守る方法も学んだ、友人にも、今は私が「本物のお守り」を渡している。

私の心は、今でもあの時の罪悪感で一杯になる時がある、もし、また同じような人を見たら、今度は救いたいと思うし、

友人には、姉の分まで幸せになってほしいと思う。

凱歌（前書き）

猫じい視点（？）

猫爺がまだ氏神だった頃の話。

前話の後味が悪かったなので、ちょっと変化球的に。

凱歌

昔はよく、夜な夜な夢を語り合ったものだ。

なあ柊、お前の覗いて意いた望遠鏡には何が見えていたんだい？

あの夏が私に、一体どれだけの悲しみを植え付けたか。

なあ柊。

お前はまだ、あの土の下にいるのか？

飢えと死の恐怖に悶えた、あの土の下に。

星と月だけが綺麗に輝いたあの夜。

今日の月は、まるであの日と同じように見える。

生き残った私はまるで罪人じゃないか。

何十年も、こんな思いを引きずって生きる事は、まるで拷問じゃないか。

なあ柊・・・

「下村！」

私の苗字を呼ぶ、若い男の大きな声が響いた、こんな夜に、家には一人きりじゃないか、一体誰が？

私は、座っていた縁側から、声のする庭の暗がりには視線を向けた。

猫だ、猫じゃないか・・・

声のする方、薄い月明かりの下に、猫の姿が見える。

「なあ、下村」

おかしな事だ、声の主は確かに猫じゃないか、でも、懐かしい、そうだこの声は・・・

「下村、俺の事、忘れたのか？」

そうだ、この声は・・・

終じゃないか。

おかしな事だ、こんな今更、化けてでたか？ 迎えにきたか？

「下村、俺はまだ、星を見とるぞ。」

「望遠鏡はすっかりボロだが、まだまだ使える、こっちも星は綺麗さ、不自由はしとらん、なあ下村・・・。」

「こっちに来るのはまだ先だ、そんな風に思っ生きて生きてくれ、なあ。」

「お前は、妻も子供も、孫だってもうけたじゃないか、胸を張れよ、なあ下村。」

「柊．．．」

私は返答が出来ずに、ただただ、猫の方を見つめるばかりだった。

不意に、辺りが一段暗くなる。

雲が、月の光を遮ったのだ。

再び明るくなる時には、声の主の姿は無かった。

-
-
-
-
-

「これで、良かったかい？」

「はい、ありがとうございました。」

「少しは、下村の心残りも、晴れたと思います。」

「あんだ、えらいなあ、この為に、長いこと彷徨つとったんかい？」

「・・・・・・・・」

「時間が経つのは、早いものですね。」

「私は・・・心の切れ端のようなものです。」

「本物の・・・いや、下村公平という人間の殆どは、あの夏に、南方の島で死に、成仏したはずです。」

「これで、心残りの分身である私も往生できます。」

「やっぱり、学者さんはちがうなあ、てつがくてきだねえ。」

軍服の青年は、それを聞いてニコリと笑い、あどけない少年のような面持ちを見せた。

「行き先、気安いところだええのお、見送りしかできんけど、すまないなあ。」

「・・・いいえ、感謝しています、下村がこの町で長生き出来たのは、あなたのお陰かもしれませんね。」

月明りの下、静かに敬礼する青年を、猫は見送った。

間話

ある日、僕はいつぞやの、友人のおかしな知り合いの件について、利子さんに尋てみることにした。

あまり思い出したくは無かったけれど、利子さんなら、ひょっとしたら、心当たりがあるかもしれないと思ったからだ。

「えっ・・・君も関わってたなんて・・・」

「やっぱり、知ってるんですか？」

「私が直接見聞きした訳じゃないんだけど。」

「科学的な実験なのか、はたまた、何かしらの儀式の結果なのか。」

「このあたりの地域で、神と呼ばれるモノが顕現する、そういった事があったの。」

「理由はわからないけど、この地域で。」

「ご当地物の神様・・・なんだそれ・・・」

「八百万みたいな感じですか・・・？」

「うっん、そうじゃなくて、もっと宇宙の起源とか、ゆらぎとか、そういうことに直結してるモノらしいの。」

「もともとあるものじゃなくて・・・。」

「物理法則とか、当たり前存在するものが、形をもって顕在化した、みたいな感じだと思う。」

「スケールでかいですね・・・。」

「私は関係ないよ、一応、一般人枠だからね、これは兄から聞いた話なんだけど。」

「とにかく、この地域で散発的に、そういった現象が起きたの。」

「その時期にこの辺りの、なんていうかな、霊的な地場がめちゃくちゃに荒らされて、その処理の為に、兄の所属している協会の人達が動いて。」

「私はその時に、兄から話を聞いたの。」

「利子さん、お兄さんがいるんですか？ 初めて聞きましたよ。」

「うん、兄は養子なの、私は兄が家に来てから、あまり時間を置かないで家出しちゃったから、あまり兄弟って感じはしないけど・・・」

「兄は、本来私が継ぐはずだった家督を、私の代わりに継いでいるの。」

「家出しちゃったから？」

「・・・そうよ、すいませんねっ！」

顔を赤らめる利子さんを見るのは、これが始めてな気がする。

「でも私女だし！あの家にずっといたとしても、どうなったか分からないし！」

「才能だって・・・」

「なんていうかな、私の、もっと凄い版みたいなの、プロみたいなのたちはもっと、組織的にあれこれしているんだけど。」

「言っておくけど、これは内緒だからね、私の家は、元々そういった事に関わってきた家系だから、それを取りまとめる組織とも繋がりがああるんだけど。」

「でも、とにかくあの時はすごかったよ、知らないだろうけど、世界中からそういった関係の人たちがこの町に集まっていたんだよ。」

「当時の新聞とか、関連した記事だけを集めるとね、凄いよ・・・」

「でも結構昔の話だし、その話は結局、ひと段落したはずなんだけどね。」

「君の話だと、それ結構最近だよね？」

「ちょっと時期がズレるんだけど・・・」

- - -

やっぱり、あれには関わるべきでは無かった、少なくとも一般人である自分は。

あの時逃げ出したのは、正解だったんだ。

自分の中で結論してから、自分で話を振っておきながら、これ以上この話をするのも怖くなってきた。

これ以上、この話に関わるのは良くない。

自分も、あの日湯気を上げていた、赤い水溜りのようになってしまいう可能性が、無いわけではないんだ。

利子さんの顔色も、会話の感じとは裏腹に、この話をする前とは、明らかに違うように見えた。

彼女すら、関わりたくないと思う程、異質なものの。

ただ、確かに、自分達が関わったあの件は、結構最近の事だったので、ひよっとしたら・・・

そう思えたが、あまり考えないことにした。

あれこれ雑談を終え、利子さんの新しい占いとやらの実験も終わりで、帰り間際だった。

「あ、そうだ、言っておこうと思ってたんだっ！」

「??」

「猫のおじいさんは、大切にしなよ。」

「え？」

「今日会った時ちょっと驚いたけど、その繋がりには、大切にしたい方がいいと思うよ、悪いモノじゃないし。」

「私にも今度会わせてね！」

そういえば、話をしていないのにバレている。

先日から、変な猫が家に住み着いているのだ、いや、やっぱりあれ

は住み憑いているが正しいのかな・・・。

特におかしな事も起きないので、極力気にしないようにしていた。

どうやら猫じいの姿は、他の人にも、猫として認識されているらしい。

でもなぜか、母も、姉も、猫じいの事を、おじいさん、とか、じいちゃん、と読んで可愛がるのだ。

それに動物が大の苦手の母が、猫じいを可愛がるのが理解できない。

昔、ベランダにやって来た野良猫を、凄じい剣幕でホウキを片手に追い払った母がだ。

猫じいめ、上手くやったな。

続

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6397v/>

日常の隙間と恐怖

2011年11月12日19時40分発行